

公開講演会

2008 年アメリカ大統領選挙と宗教勢力

● 講 師 ●

く ぼ ふみ あき
久 保 文 明 (東京大学大学院法学研究科教授)

なか やま とし ひろ
中 山 俊 宏 (津田塾大学学芸学部准教授)

● 日 時 ●

2009 年 1 月 31 日(土) 午後 1 時～3 時

● 場 所 ●

同志社大学 今出川校地 神学館礼拝堂

○入場無料・事前申込不要

○問い合わせ

同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR)

TEL. 075-251-3972

E-mail: info@cismor.jp

HP: <http://www.cismor.jp/>

【プログラム】

- 1) 講演 久保文明（東京大学大学院法学研究科教授）
「2008年アメリカ大統領選挙における宗教」
- 2) 講演 中山俊宏（津田塾大学国際関係学部准教授）
「政治と宗教の新たな関係：変貌を遂げる福音派」
- 3) 質疑応答
司会 森 孝一（同志社大学一神教学際研究センター長）

【講師紹介】

■ 久保文明(くぼ ふみあき)

1956年生まれ。東京都出身。東京大学法学部第3類卒業・法学士(東京大学)。法学博士(東京大学)。東京大学助手、筑波大学講師、コーネル大学客員研究員、筑波大学助教授、慶應義塾大学助教授(法学部)、ジョンスホプキンス大学客員研究員、慶應義塾大学教授、ジョージタウン大学客員研究員およびメリーランド大学カレッジパーク校客員研究員を経て、現職。アメリカ学術団体評議会(ACLS)アメリカ研究フェローシップ、国際交流基金日米センター・社会科学研究評議会(SSRC)安倍フェローシップ、日米教育委員会フルブライト・フェローシップなどを受賞。著書に、『米国民民主党—2008年政権奪回への課題』(編著、日本国際問題研究所、2005年)、『アメリカの政治』(編著、弘文堂、2005年)、『北アメリカ(第2版)』(共著、自由国民社、2005年)、『アメリカ政治』(共著、有斐閣、2006年)、『超大国アメリカの素顔』(編著、ウェッジ、2007年)、『アメリカ外交の諸潮流—リベラルから保守まで』(編著、日本国際問題研究所、2007年)など多数。

■ 中山俊宏(なかやま としひろ)

1967年生まれ。東京都出身。青山学院大学国際政治経済学部卒業。青山学院大学大学院国際政治経済学研究科国際政治学専攻博士課程修了。博士(国際政治学)。専門はアメリカの政治・外交。ワシントンポスト紙極東総局記者、日本政府国連代表部専門調査員、日本国際問題研究所アメリカ研究センター研究員、同主任研究員、ブルッキングス研究所客員研究等を経て、現職。著作に『アメリカのグローバル戦略とイスラーム世界』(共著、明石書店、近刊)、『アメリカ外交の諸潮流—リベラルから保守まで』(共著、日本国際問題研究所、2007年)、『アメリカ政治外交のアナトミー』(共著、国際書院、2006年)、『米国民民主党—2008年政権奪回への課題』(共著、日本国際問題研究所、2005年)、『帝国アメリカのイメージ—国際社会との広がるギャップ』(共著、早稲田大学出版部、2004年)など多数。

【講演概要】

2008年アメリカ大統領選挙における宗教

久保文明（東京大学大学院法学研究科教授）

1. はじめに

2008年選挙の意義
政党対立と宗教
世俗派対信仰派

2. 2008年選挙における投票傾向

出口調査を見ながら
宗派による違い、2008年の特徴
若者の投票動向

3. 宗教保守派と大統領選挙(これまでの展開)

1960年と2004年
1970年代後半の変化
ERAの位置づけ、共和党の変化
1992年と1996年、および2000年と2004年

4. オバマと宗教的争点

人工妊娠中絶
同性愛者

5. オバマが失望させることを選択する人々

民主党左派・反戦派、同性愛者団体、自動車労組

6. 宗教界の新たな動向

地球環境、貧困、エイズなど
他方で、イスラエル

7. 終わりに

【講演概要】

政治と宗教の新たな関係：変貌を遂げる福音派

中山俊宏（津田塾大学国際関係学部准教授）

「クリスチャン・ライト」といえば、これまで「不寛容」と「排他性」の象徴のように語られてきた。それは、「中絶」や「同性婚」などの問題を「政治化」し、アメリカ政治を分極化させることで大きな影響力を行使してきた政治勢力であった。1970年代後半に福音派キリスト教徒がポール・ワイリックやジェリー・ファルウェルらによって政治的に動員されて以来、「クリスチャン・ライト」は共和党にとって、民主党の労働組合に相等する不可欠の支持基盤となった。「クリスチャン・ライト」はいわば保守主義運動の歩兵であった。そして、共和党の政治家でこの勢力と距離をおくことは致命的と見なされるようになる。

2004年の大統領選挙で、G・W・ブッシュ大統領は全体としては支持率を落としていたにもかかわらず、クリスチャン・ライトからの支持をとりつけ、勝利にこぎつけたことはまだ記憶に新しい。逆風の中での勝利を可能にしたのは、「価値観に基づいて投票した人々 (value voters)」と呼ばれた「クリスチャン・ライト」の存在であった。共和党と比べるとはるかに世俗化がすすんでいた民主党は、宗教保守派の組織票を基盤とした共和党の選挙戦略に対抗する手段を欠き（労働組合の組織率はますます低下する一方であった）、今後しばらくは共和党優位の時代が続くというのが、有力な見解であった。

しかし、2004年以降、政治と宗教の関係を見ていく上で、いくつかの重要な変化が現れはじめている。まずは、「クリスチャン・ライト」の台頭を支えた運動の創設者たちの退場である。そして新たに登場した指導者たちの中には、これまでの「クリスチャン・ライト」という括りではすっきり解釈できない人たちもいる。また若き「クリスチャン・ライト」たちの関心の広がりである。彼らの中絶に対する姿勢は反対ということで一貫している。しかし、貧困やHIV／エイズ、アフリカにおける人道的危機、さらには地球温暖化問題など、問題関心領域を広げている。これは、自分たちの信仰が「不寛容」と「排他性」の象徴と見られていることに対する違和感の表明であると同時に、より包括的に「プロライフ（命の側に立つ）」という立場を貫いていこうという問題意識の現れでもある。

今回の報告では、この「新たな傾向」が2008年大統領選挙でどのように展開したのか、はたして政治と宗教の関係をめぐる状況に地殻変動はあったのかについて考えてみたい。

【次回公開講演会】

最近のコーカサス情勢

—政治変動、民族紛争、宗教、グルジア紛争の影響などを中心に—

日時：2009年2月14日（土）13:00-14:30

会場：同志社大学 今出川校地 神学館3階礼拝堂

講師：廣瀬陽子（静岡県立大学国際関係学部准教授）